13

寛永諸家系図伝

義家流之内　新田流　氏甲九冊之内

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (13)
函號 甲 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

山名　志賀
由良
大鴻
田中
島山

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義家流

新田啓流

山名

甲九

淺草文庫

義家

八幡太郎　陸奥守　鎮守府將軍

義國

式部大夫

義重

新田大炊助

義範

伊与守　伊豆守

冠者と号す

山名の元祖　山名の

義約

重國

太郎

兼明つ院の殿人

重村

重長

義後

又義忠と改む

政氏

又義氏と改む

時氏

伊豆守　左京大夫
坂東より初めて上洛し　上京されるる
十六人なり　同播　但馬　丹波　丹後
義能　丹波守護となり
法名　結願道静　光春寺と号す但別
なり

氏清
時氏四男　清興　継ぎなし

時義
明徳二年内野合戦　おおく討死
宗鑑と号す

時熙
時氏六男　伊与守　法名大善寺均
圓通寺と号す　但別鷹野　なり

時凞
宮内少輔
鹿苑院義滿公　藤代の方と時凞

たまふ　うまこの藤とくくうへ紋
とすのつぼいとくく氏清後れとき時
源一族ともに義満に屬して軍功と
げまる諸の紋氏清と同くして乳
ものかたりかづ　ものに屬れ葉と
もくく諸の世ともにけるこの世る紋
よ諸のうへ紋なすとかう氏清ら死
て後但馬へ紋代代別れ居す
清和巨門　大明寺とも号して　光月菴ふ来ず

和州河内の道成寺本尊の碑文ふ見
うり

摂考

出雲守
但馬　因幡　伯耆　備前　備後　播磨
義仲　石見　八ヶ国守護
清名最高道華
香炉院と号す

教豊

伊与守　法名玄旨　大智院と号す
但別あり

政豊

右京亮　宗源院と号す

致豊

弾正少弼
但馬　内情　あるの守護なり
法名芳心宗傳　栖鳳院と号す

老宣

九郎　内別の古濃　春仙院と号す

豊国

中務大輔　母は細川高国の女なり

代こ相法ゆく因情は守護となり名和の
城こ居す時は豊岡が家老どもこのひとも
うむしく別ゆこ君とたてまつこ
は少人は豊岡則秀吉は屬して当取の城
と世あおこすこもども豊岡つのふ中岡
と仕ぜたうはら

東照大権現はこくしへまる

天正十五年流紫陳のとき

大権現但馬は山名義澄なるひは豊岡ふ伝

ていこく山名の先祖伊勢守義範い新田義
重はなりこきい元祖我と同じ
我ゆんゆ知ろめせんとの給ふ豊岡ふて
けなさ　台命とかろ

天正五年関原陳のとき正枝紹常
亀井武義ら八本庄城ゆ古田垣監物と
ともは法なす信利とはまひくはら
作りこくひく但馬の竹田はもこ秋村
左兵衛ゆ城こ法ゆ岡はと支配其

後円融七味初と給わり是と修初す
大坂陣のとき　行基菩薩
八幡おまもりざるもなり志れば三宝
監初と号国と正殿及修み所をさら
位と給わり修業す
寛永三年十月七日病死　七十九歳
法名禅言　東林院と号す　院八妙心寺
小三郎所

豊政

平安城　生母周懐
大樹堂
石垣院殿　法名
関ヶ原陣　大坂両陣
いづれも手柄
寛永七年六月廿九日死去　六十歳　法名
道業　法雲院と号す

豊義

大弐左衛門

[illegible]長

八左衛門

紀州大納言頼宣卿幼少のときより

[illegible]番頭となる

[illegible]清

愚書

寛永七年

初軍家と為渇しまる

英育庄

妙心寺　東林院

豊玄

次郎左衛門

寛永十六年

初軍家と為[illegible]

同十七年御書院番と勤し

豊守

長左衛門

義照

重長弟　生母武州産

寛永五年

将軍家御供くまゝ

義頼

左京亮　生母武州

寛永十七年

将軍家と共に生る

同十八年御書院番と勤し

家紋　桐

添紋　七葉根藤

国立公文書館
National Archives of Japan

志賀

家信小いさく山名氏嫡流なり

義範十二代

教之

山名伊豫守　但別あり

法名玄蕃　大智院と号す

改豊

右清門院　京源院と号す

豊徳

肥後　山名と同じく海老名と称号

とす

巻一

源助　海老名と号す

流紫庫北河内

改近

肥後守　直象と号す

伯耆羽衣石の城主　法名道序

改徳

源次　海老名と号す　生国但馬

永禄三〇改徳十四歳なり　山名中務大輔

入道禅高が許より坂西象伯耆守
元徳に属す
天正二年元徳と共に毛利方に
伯耆国中の政務を沙汰せしむる政徳
世八家を後元徳病死す二家の男子
迯げ出て秀吉元徳の伯父孫を
兄弟清の射元清に
りしまゝ世を背き法士になりて
迯げくらしゐる元徳が家臣元祐

と秀吉に出さくく秀吉元清と加茂郡坂
田に下り家臣となる法名
政徳い石田治部少輔三成を
は秀吉に命じて法名と巡検せしむ
とき三成薩州と巡検を政徳ことゞ
事終る
翌七年八月秀吉逝去の時政徳
剃髪して良いと
同七年石田情出に報告す

白滝院殿は清和天皇の
四代上野国緑野郡の人にて本姓は
秦清郷と云ひ
元和九年九月十日病死七十七歳法名
白安

定徳

志賀大夫清村
母は源氏関防守の女
生国尾州

定徳元来山名氏の人にて母の氏は
源氏と称せり仲家の関
源氏は清和と称せり又祖
母の氏は志賀と云へり
寛永十五年定徳十五歳にして
白滝院殿と号す父長老の
勧むる
同年父の跡を定徳嗣たり

同十九年大坂陣ハ仕事
元和元乙大坂丸のとき五月七日天王
寺口ハ敵と討ち首級とるもの
所へ入治なしびハ日光御社参ハ
市蔵殿当地御参毎度ことゝ勤む

女子

久野出雲守宗次書

宗徳

出雲守
賀八久野出雲守宗次ゝ子宗徳こ
もと所ゝ子ゝ

宗房

寅右衛門

宗重

和右衛門

女子

家紋相（つのもんそう）　或ハ七葉九枝藤（ななはくしだふじ）

国立公文書館
National Archives of Japan

由良

義國

寛治三年八月三日誕生
童名菊賢丸　足利式部大輔
家時入道康和三年正月七日十三歳
にして始行の冠を進覧の大夫として
足利太郎定義朝臣の婿となりて

国立公文書館
National Archives of Japan

基綱がむすめとめとりて男と云ふ

義重

新田大炊助　清和源西

母は源基綱がむすめ

頼朝卿より書状一通これあり

義遠

新田義人

義房

新田太郎

政義

新田又太郎

基氏

新田三郎

朝氏

新田太郎

義貞

正四位　左衛門督　播磨守

上野介　越後　三河　左近衛　相模

武蔵守　九州守護

義興

正元二年閏七月二日　越後国にて死

時に三十九歳

脇屋左衛門佐　刑部卿

義治

式部大輔

義顕

越後守　越前守金侍従おおく月害

義真

左兵衛佐

義宗

武蔵守　左衛門督

貞氏

家時よりいまく義貞うち死れとき六家にて
してあるとかう　極楽寺六の寮の半ばなり
長田弥七郎　長田極楽寺
ぐむことなりつ　長田極楽寺
ごとなり寸

貞治

極楽寺　佐渡守　生年正月
新田金山の城に住す　法名良政

貞國

新六郎　信濃守
清名良秋　生国信濃国

國盛

新六郎　信濃守
清名宗秋　生国信濃国

宗盛

新六郎　信濃守
清名宗忠　生国信濃国

國弘

新六郎　信濃守　生国信濃国
武刑須賀合戦のとき討死清名宗功

泰盛

新六郎　雅亦　生母任而同じ

法名宗虎

父岡部ちち死したとき方松院殿より書と

給わり

成繁

六郎　生母任而同じ

光源院殿したとき書と成繁へなりて

相続したまへり　門号天瑞

と称す後に信濃守となり

也尾輝虎依り義重時生黒川沼田へ

也弟して小除氏改と合戦したとき成繁

かつて深とまりゆへ輝虎公より

うちうちとき成繁歓三百余人と対し

氏改このおもしさと源義氏古河古而かつ

もつて義氏より感状を通と成繁に

さげく

父輝虎と赤堀合戦したとき成繁父子

軍功あり
光源院殿之始め越せ給ふ時義昭
より仕ふ東国にて成敗仕
たまふ軍忠とりすべきもの
法名宗得

國盤
中沢六郎　信濃国の
法名良右　生国同

天正二年四月輝虎桐生山に生るとき
国盤所の城と名付て
かゝゆへ輝虎名と引うけとき氏政
より威勢を国盤とる
同十八年小田原没落の後秀吉より常
州のうち半分の所とまゝ知行
と国盤が母なり城主
東照大権現

台徳院殿へ仕へ奉り

頭取

足利右馬頭理亮ガ舞となりて主家と

仕へ

貞盛

新六郎　法名仕上下　お掛ル　住濃ル

法名長市

大猷院

台徳院殿へ仕へ奉る

元和元乙卯年五月七日大阪合戦のとき貞

盛が家人当或い首とるとも或ハ疵とかう

ふるものあり

貞長

新六郎　市兵衛

長吉

生涯常州　法名

台徳院殿

為軍家御供人衆

貞房

新六郎　生年武歳

父の生涯をはいぐ知りをたゝ終て

為軍家御供人衆

家紋桐

大鴻

義継

大鴻義人

新田大炊助義重八孫里見義俊次男

氏継

三郎

国立公文書館
National Archives of Japan

義隆

民部丞

左衛門

尉隆

民部丞

左衛門

尉兼

義人

尉隆

義人

義兼

民部丞

光綱

義人

義勝

左衛門

系

童名西義丸

生母伊豆

宮殿ゆいもく面前幼雅にして優歌と
このむの一叡山達一のときに
遊く春日すはみこ胡蝶花来く
樓庭の梅花みとまる色香のごやと和同
ひりれも面前蝶なりと和答りと
勅使のいもくこあるものいを数まなると
いんとして童とハりうと雅じ色六
一ひりの名もあるといふなもハ
三ひりのもとてもとしいもり

光家

と涙じれむけかつぐ叡感あつて梅樹と
三蝶とくく家後とすぐさま和答あ
月のもとあくく梅と蝶とくく
後とん
今楽どろも面前動りの
洋なすとく人ども志ぐく後家
結とのす

左近将監　生田丹波
義清山縣の一のとり出とも
日本郎の士卒と地とあらそひく戦
死す

光義

雲八　生田兵濃
永正年中光義狐猫のごとく濃
州の住人と地とあらそ

合戦度しと紀なり光義十三歳にて
敵一人と射たるす
うれは鉄炮はじめて中朝にて兵法
ゆゑく敵を討こまとるつゆ味方なか
く障碍す一人の敵を鉄炮とく光義
とうぐ光義ら相しひつる
を敵と射たるす
或とき敵を樹陰かくまとる光義を樹
本と射つめさ敵の首よりうる敵兵

光義ゟ勢と威じてうれ樹なひ首と
切くうれ矢とぬすして光義もとみとる
或とされ合戦ゟ光義ゟ矢と放
ちるとバ敵兵ゟ色ゟ恐こうれ乃わ
けゟ絶れちとゟ色ゟ光義とつんと
す光義勢の矢とめさせて伴の敵と
対こうす光義ゟ対戦このまゝ世ゟき
こうのるとき該府ゟ知らく
東照大権現ゟ仰せなきとゟ以年

と言上す
七井隼人東美濃ゟ山縣村ゟ岐山城守
ゟ居城とせむとき城中より根小屋ゟ
出くく町ゟ本戸口ゟ迄と光義
隼人ゟ属して本戸とさて敵と対
ちくく又ゟ若川ゟ迄い絶と乗て本
戸とひくさせゟ入ゟう敵ゟ城中
引さう光義首一級と切くく火と所に
ゟちかくくちう同ゟ勢城ゟ

西宮山城守と七井隼人と防戦のとき
光義他所より来て七軍勢をおさめ
て攻る光義が同友若大膳首級を挙く
攻ると光義より敵軍を下十
四丁所を追ひ詰べしと攻ゆく光
義馬をとゝめ敵之騎と対おし
首級を挙ゝ攻ゆ
七井隼人同加治田村作友紀伊守が
城をせむ敵強甲ゆえ敗北ゆえ
光義法下ゆおゆく紀田言蕃とゝゆゝ
言蕃ハ来田の城主ゆえ
加治田ゆ
七井隼人浪人と成く負落ゆ
後光義信長ゆ属して与大ゆ
元亀元ゝ婚川合義ゆ
ゆ信光義光ゆけゝて敵数人と対
ゆゝ寸信長と感ず
同二年信長江州ゆ出張して兵庫ゆ

浅井が軍士味方はしりうとうんとす
信長栄田隆理すれども命じてもつてせ
むるときに光義信長はれ下知あり
田みわくらう兵とまりうてうつて海
天正元年ちおの軍士湖水出
て引きうけんとするときに信長みづ
馬とせくに欲のうしろとうつ光義先
陣ゐるんで欲をくに対おとす信長こ
を感ず

同二年七月合戦なりしに近おの一揆
西治のときに光義戦功あり
同十年信長月殺のときに光義安土
城ゐ行のときに陣中士卒騒動し
て城と海ぐらゆくとくくとのく書
引つ地ゐにげうる光義なりしに兵
清ゐ信地のある軍ハおとるゐ動ゐ
もてぐろ清次みくに一揆蜂起す光義ら一
張みくに大勝と対ちいたくなくゐ

加藤
主殿秀吉ハ屬してち大ゐとなる或時
秀次ハ命ゝとうもゝ矢十郎と八坂ハ塔の
出童ハ宗へ対こむ後人ゐうハち物と主
ちんが高仲の矢と塔四ゐおこむ
慶長五年上杉景勝と戦治として
大指現下野小山ハ清水陣のとき光義
仕ます石田三成と方ゐゝ張及のつげ
ゐうゐう書ゐと上方ゐゝ後治ゐと
色さハ命ゐうといへども光義ゐ年
大指現ハ来遇とゝくゐゐ書ゐとゐうず
仕ます列長ゐさハ言として開発
あもゝ三成仕様の後大坂ゐあゝ去
童なゝびゐ大舞こゝと為すと後
大指現仕ゐい光義ゐ書ゐとゐうず
て小山ち関ゐ仕ます忠志と
感ゝおゝゝ去ハゝ去後ゐ門杵の
城ゐ拓ゝべさハち多工指及　上ニ

此あるものさ[illegible]光義申名ハ祢
りくハ本領義清ハ此関と称りべきよ[illegible]
言上しなるハ長清の関をびみ
拾遺ハ[illegible]一万石ハ[illegible]
りり物合一百八石と領して公役者
と[illegible]

大権現ハ命ハ[illegible]東照宮ハ[illegible]
而ハ御書者光二聯とも[illegible]
光義

大権現
台徳院殿と西湯[illegible]後府江戸
ハいろハとき牛馬者西府中者[illegible]
舞場と称ろうハ御舞場の地先
も清光と[illegible]て舞と[illegible]
りとき清方[illegible]業へと

大権現ハ敬ず法ハ又光義ハ[illegible]
台徳院殿[illegible]教ハ大舞ハ業舞と
[illegible]御馬と[illegible]て[illegible]のたびとハ御馬

なびき金銀長服等を下さる
坂府御城造畢の後光義坂府に
向のとき
大樹秀義と御城を取て住名ハ石
垣矢狭号等とし〻くゝんゝ段〻ちう
あゝハ言とも名〻ちう
御ゆゑ也ゝ〻ゝ対警ゝびに光義が
もゝの我世となつるゝ
寿永九年八月廿五日死去 九十七歳

法名道林

光成

次右衛門 一名光安 生国清州
信長秀吉に仕へ数度の軍功あり
関原陣のとき
大樹秀忠に召出され仕へ
寛永十三年十一月十六日死去 五十歳
法名了伯

光親

弥三郎　一名八光長　生母同家

秀吉ゟ出羽ニ

父光成と同時ゟ

大権現ゟ出羽ニ

光成死去の後老近と成

大坂表度の出陣一族と同じく

枚方ゟ生害ス

光俊

寛永六ノ六月廿九日死去年八歳

光繁

八郎左衛門

光好

茂右衛門

直馬

義豊

久吉　初名は光豊　生母武藤
父光親死去の後義豊を継ぎて
将軍家に仕へ奉り
寛永十四年十月十七日死去十三歳
法名日性

光政

義豊　生母法明

光政頃のとき栗山氏と申し奉る
法名頃義幼少の時分同母の弟武市
太郎義同右京八百俵人扶持
光政が居城を出でしとき光政歓教人
を村々にて城と出でいづる我儕村
と称す
同同の弟人形屋新兵衛森武蔵と称
我のとき光政新出来に属して出来
を歓喜祝渕し格別に奉り光政

ら一張ゆるくこれとつせぐ
織田信長摂州伊丹の城とせしろ
光政家臣に属し光政家臣原金兵衛
と一番に城中へ参入光政首級をとる
法外堂洞に如何
と合戦のとき光政言葉が組にいろく
歌を枝柄新助と地とにのる
越後家臣信長奥さと合戦乃やき
信長信長奥さが加勢として家臣新
とつらら家臣が光陣門田を討る大軍
を引ゐく新助陣所に陣所合戦の時
せし新助小勢にて大敵にむふとき
光政新助に属し原金兵と同じく
一番に地とにのる首級をとる手後
又家臣門田と合戦の時光政敵と太刀
打して首とる
信長生害とき織田三七信孝丹波
秀吉大坂に陣に織田七郎とつれ

とき光政も秀吉に属して首級をあらそ
秀吉岩国と合戦のとき光政も秀
吉に一志津嶽に出張し光政ならびに
石田小西郎安藤寺勝助三人一組の
ちゆうく一番に進とのいつも
先後秀吉に幕下に進行す
秀吉薩摩陣のとき秀吉
一隊の出張にまかりくまで又進行
し光政沢山一隊と退陣して秀吉と

たゝく
秀吉薩摩より陣の後光政と仗者と
して金の切割の指物をたまふ
秀吉朝鮮征伐のとき仗節として朝
鮮へ渡海し朝鮮にて加藤嘉明
が軍功と秀吉に聞こえ
寛永五年関原陣のとき
東照大権現に呼出まうしまる
光義死後遺跡をうけたまふ

大坂の楠木正成一族と門のく枚方
八幡番と勤む
大楠公蛍井の坂
白地院殿
将軍家の御ふくろ
白地院殿仲勝と申ふとき金紙長脇と
毎年すこしい御馬とつまふのも
こと所
元和八年八月十五日卒業法名

光盛
月勇

右大臣
生駒山城
大坂楠公正成一族光盛まで仙者
忠後の為して軍すと勤む
八月七日合戦のとき敵兵数多天王
寺迄出張す光盛先陣わけて
強くたいせいたくふといへども敵

多勢なりゆへ法名を永正
元年かくれ給ふと尺る時
光盛二十七歳　法名宗伯

義唯

義澄嫡　生国山城
享年十八年
大権現と奉号し給ふ
石清院殿へ法名
大阪殿の法陣を坂方法書勧

元和八年光政卿の後世記
録
後府中城実正後府信
ひとり義唯
勧む
寛永十七年義唯番地を数して
濃州用とかへ給ふ義を而仮
地なり義を死して家とて
みなきみなり地と百姓

父光義が勲功ありとて
なを西の北方を友と又如此

義近
兵吉　生国武蔵
寛永十二年初めて
将軍家へ御目見

義保
七蔵　生国同所

義當
平八郎　生国越後
寛永三年
将軍家へ御目見
同十年来地の御加増と為給

義益
三郎　生国同所
寛永三年
将軍家へ御目見

義豊公ハ病ヨリ御隠居ト
なり兄義隆ガ領地ヲ継ぎ

春政

久五郎　生母武藤
元和二年十二月春政出家ス
なり
后法院殿ト号ス
寛永十二年

為軍家ヘ召ヒられて御小姓組の番
と勤む

光俊

久五郎　生母藤流
光俊光政と同じく母ハ長谷川
て志津嶽ヨリ首一級と討ち取る
ひ
多吉藤戸陣のとき光俊光政と
一番ヨリ軍功とゝげます

関東陣は少き神あく

大権現とあしきを

光義死去の後うの老法と号し、

大坂を度は清陣は光俊光親光政と

ひく枚方の清番と勤む

大権現薨御の後

白河院殿みはてくまいる

元和四〇七月十四日死去年八歳法名

体安

義治

久左清　生母同お

白河院殿みはてくまいる

大坂を度の清陣は紀一族と同く

枚方み生番寸

光俊死去の後を法と名る

白河院殿薨御の後

相軍あみはてくまいる

寛永十八年十二月十三日死去年五歳
法名日量

義雄

義八郎　生母武藤

寛永九年

初軍　家光法名

同十九年父ガ老病ヲ理由

家紋梅の打違の上羽蝶

国立公文書館
National Archives of Japan

田中（たなか）

●家（いえ）

長次郎　生国三河

清康（きやすやす）様御代

義綱（よりつな）

長次郎　生国同家

廣忠卿 仲代より
東照大権現様に
永禄六癸亥年一向宗一揆蜂起の時
伯父[illegible]忠清 和田[illegible]左後
[illegible]地を[illegible]

義忠

長次郎 五郎右衛門 生母同
大権現様に
元和元乙卯年五月十日後府様御薨去
年三歳

忠勝

五郎 市郎右衛門 生母[illegible]
大権現
台徳院殿
御軍家に
寛永九壬申年八月
伯父[illegible]て小十人

紐の頭となる

同年十二月　鈞命をもつて布衣を

許す

同十九年御鉄炮与力歩行同心となる

義次

出羽守従

生母武藤

大橋氏

台徳院殿

将軍家に謁する

吉正

松平十右衛門　生母同人

外祖父松平右京亮忠直

となるゆへ松平の称号を用

将軍家に謁する

猪之助

小十郎　生母同家

寛永十六己卯七月廿三日

初軍家光ニ奉ー拝謁

三之丞　生母同家

家政　本庄

●系

為山

女七郎　法名了蓮

松平甚左衛門義書妻法名

生母三河

精修

母彼　生母同家

三家ときの父与七郎死去ありしく
精後五年のときも家ちの洞意に
号すうちの墨俗して西三河東條に
住して時々
東照大権現と為御対面
天正十八年関東御入国の時
伊豆守西信 住とうけく浮みあるて
精後の風説とたまふ事もゆへ
ありてこれと辞しと

精明

為也之関原御陣のとき三列古田に
おわく永井右近丞養志みく
大権現と為しもあすかうち伝生
田之 住みして三列のあるく御代
度とうもたまうる
精後顧るなきのみ
と風なりく老とつづし

精明

牛之助　　生母橋列

大橋規

台徳院殿

将軍家より御三列御代度

と仰つけらる

寛永十五年御切米として

四十八年八月二日

行長君御逝生精的御戸めさるる

行長君を

橋彦　　生母三列

寛永十六丙卯年五月五日初めて

将軍家と御湯しなる

家政九の図小鳴酸草

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan